

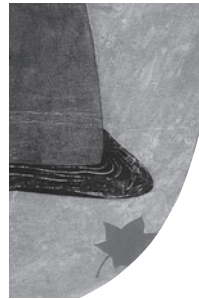
[特別展 茶の湯の造形展によせて]

尾形光琳筆「紅葉流水図」について

尾形光琳は掛幅や屏風だけではなく、扇面や香包など様々な形式の画面に描き、団扇面にも数多くの優品を残しています。原三溪が所蔵していた「紅葉流水図」(五島美術館蔵)も優れた団扇面の一つです。この作品には、金地に紅葉が色づく秋の山が描かれています。現状は掛幅ですが、当初は柄の付いた団扇であり、裏面には蕨が萌え出る春の野を描いて表裏で春秋の景を表していました。季節から考えれば、本来の表面は春の「蕨図」の方でしょう。両図には木と蕨の弾力を含む濃墨の瑞々しい線描、画面上での図様と余白の比率など多くの共通点が認められ、ともに同じ絵師の作品と思われる。「紅葉流水図」に落款、印章はなく、「蕨図」に「法橋光琳」と落款を記し、「潤声」の朱文方印を捺しています。ただし、落款と印章の位置関係が不自然であり、窮屈な落款は後から加えられた可能性があります。「潤声」は光琳の画号の一つであり、元禄十七年(1704)三月、光琳が四十七才の年に描いた「中村内蔵助像」に、「潤声」と刻んだ別印を使用しています。

「紅葉流水図団扇」に描かれるのは、二つの山裾、紅葉と青葉の木と小川だけです。山裾の形状は単

純化され、紅葉の葉は非常に大きく、絵画としてはかなり意匠的に表現されています。山裾の温かい緑青の広がり、小川の冷たい群青の流れ、紅葉の葉の目が醒めるほど明るい朱は、金地を背景に鮮やかに映えています。平面的な意匠としても十分に鑑賞できますが、絵画にとって重要な山裾や木の立体感や画面の空間は失われています。山裾の丸みを帯びた輪郭は確かなボリュームを伝え、青葉と紅葉の木は小川の上へ弓なりに枝を差出しています。小川は奥の山裾の裏側から、山裾の稜線と平面上の均衡を図るように、急な角度で回り込んで姿を現わし、二つの山裾を巡って流れています。地平の広がりはこの小川によって暗示されています。地平の広がりにより明確にしているのは、画面の右下に配された大きな紅葉の葉です。この葉は明らかに小川と同じ地平に落ち、二つの山裾の間で小川が奥へ蛇行する部分と呼応して地平の広がる方向、すなわち、景観の方向を定めています。つまり、地平はかなり見下ろした視点で捉えられ、山裾を捉える異なった視点と大胆に組み合わせられていることがわかります。二つの山裾も微妙に傾きが異なります。手前の山



同部分



つつじ図 畠山記念館蔵

裾の稜線は強く湾曲して充実したボリュームを示し、より重たく感じられます。この稜線を左へ折り返せば、団扇の左側の輪郭とほぼ重なり、山裾を画面に嵌め込むようにして、景観をしっかりと支えています。光琳は図様を互いに対称となる位置に配し、緊密に関係付けるこのような構図法をよく用いています。「扇面貼交手筈」(大和文華館蔵)に貼られた「富嶽図」にも、同様に扇面の輪郭と富士の稜線との対称が図られています。この安定した「紅葉流水図」の画面に動きを加えているのは、青葉と紅葉の木です。左手前の青葉から斜め奥の紅葉へ視線は自然に導かれ、右上の大きな紅葉の葉にいたります。この大きさは地平に落ちた紅葉の葉とほぼ等しく、右上の紅葉の葉が団扇の輪郭に沿って滑り落ち、地上の紅葉の葉へ連続するような流れを感じさせます。「紅葉流水図」では団扇の形状を画面の構成に巧みに活かし、左右から

画面を力強く引き締めています。

「紅葉流水図」と近い作風を示す光琳作品に「つつじ図」(畠山記念館蔵)があります。「つつじ図」と「紅葉流水図」では季節は異なりますが、ともに山間の小川が流れる叙情的な景を描いています。「つつじ図」には、「法橋光琳」の落款と「道崇」の朱文円印があります。元禄十七年は三月十三日に宝永と改元されます。光琳は七月に「道崇」の画号の文字考を中根元圭に依頼していることから、「つつじ図」は光琳が江戸に下向した宝永年間に描かれたと推定されています。おそらく「紅葉流水図」も「つつじ図」とそう遠く離れない時期に制作されたと思われます。

(中部義隆)

〔「蕨図」の挿図は、五島美術館学芸課編『五島美術館の名品』昭和60年五島美術館刊、「つつじ図」の挿図は河野元昭著『日本美術絵画全集 第12巻 尾形光琳』より複製させていただきました。〕

紅葉流水図



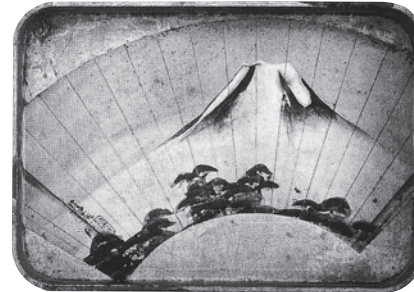
蕨図



同部分



富嶽図



季刊 美のたより No.144

平成15年10月11日

発行 大和文華館